

N P O

百花繚乱

ひまわりようらん

第14回

ニューヨークでボランティア

NY de Volunteer

国際相互理解の推進と、
社会貢献活動の啓発を通して日米の架け橋に



アフタースクールでボランティアに教わりながら書いた習字の作品を手に、NYdVでは日本食、武道、茶道、踊りなど、楽しみながら学べるプログラムを多数用意している。

海外に住む日本人はたくさんおり、なかでも、もともと日本人が多く住むと言われている海外都市がニューヨーク（以下、NY）。それにもかかわらず、NYのコミュニティの中で日本人の存在感がなく、日本人同士のつながりが希薄であるのが現状です。そうした課題を解決するために、NY de Volunteer（以下、NYdV）というNPOが設立されました。代表の日野紀子さんにお話をうかがいます。

なぜ、NYでボランティア？

ボランティアが浸透しているアメリカでは、地域を知り、同じ地域に住む人とながらるために、ボランティア活動は有効な入り口になります。けれども、英語を母語とせず、特別な能力や資格のない外国人が、

ボランティア活動を探したり、地域社会に一人が入っていくのは、たやすいことではありません。

NYdVが発足したのは2002年。NY周辺に住んでいる日本人を対象に、ボランティア活動に関心があるけれど、最初の一步を踏み出せずにいる人のサポートをし、また、外国暮らしで孤独を感じている人に対しては、ボランティアを通して仲間づくりの場を提供してきました。語学力が充分でないボランティアも多いけれど、日本人の仕事ぶりの評価は非常に高く、「ボランティア活動を通して、国際相互理解ができています」と日野さんは言います。

NYdVでは、ホームレス・シェルターでの配膳、公園の清掃、高齢者施設での手伝いなど、日本でもなじみのある活動を幅広くこなしてき

NY de Volunteer
(ニューヨークでボランティア)

NY de Volunteer

2002年5月設立、翌年に国税庁から税金控除資格を取得し、正式な非営利団体となる。

活動の趣旨は、ニューヨーク市とその近郊に在住する日本人の社会貢献活動への参加を促すことで、日本人のコミュニティを形成し、同時に日本文化の紹介を通して、国際相互理解の推進に貢献すること。

日系NPOであることを生かした活動も年々増えてきており、メインの活動であるNY市の公認プログラム「Explore Japanese Culture An After School Program (子どもへの日本文化紹介企画)」の他、「Japanese Spa Day(美を通じた社会貢献活動)」、「9・11同時多発テロの犠牲者追悼の灯ろう流し」、「トルコ・ジャパンフレンドシッププログラム」など、幅広い活動をしている。

その他、在ニューヨーク日本国総領事館の「海外安全協議会」委員や「医療支援ネットワーク(ジャムズネット)」委員もつとめ、日系コミュニティに貢献している。

企画数350回、活動参加者数は3,500人、受益者数は7万人という活動実績を持ち、ニューヨークのみならず、日本でも注目されつつある。

URL: <http://www.nydevolunteer.org/>

ました。そして、2007年よりNY市からの委託事業で、アフタースクール(学童保育)に参加、独自の企画ができるようになり、さらに活動の幅が広がりました。

アフタースクールでは、6〜13歳の地元さまざまな人種の子どもたちに対して、子どもたちが異文化に触れることで視野を広げ、「世界市民」として違いを受け入れ、共生できる子どもたちに育っていくことを目的に、そして、日米の相互理解推進のために日本文化紹介を行っています。

日本人同士のつながりを

ボランティアというアプローチで、日本人のコミュニティ形成をすることがNYdVの特徴のひとつ。NYには6万人の日本人が在住し、在住届けを出していない人も含めると10万人いると言われています。それなのに、日本人同士はつながろうとしない。

「海外旅行をしているとき、日本人を見かけると無意識に目をそらしてしまうという経験がある方も多いいと思います。この話を他の国の人に言ったらとても驚かれました。どうし

てでしょうね？在NY邦人の平均滞在期間は3年。長期で住むつもりがない短期滞在者は、ここでの日系コミュニティについて必要を感じません。また、他のマイノリティと比べて経済的に豊かであることも、日本人同士の助け合いを必要としない一因になっています。学生、アーティスト、国際結婚している人、駐在員など、さまざまな種類の日本人がいるにもかかわらず、彼らが混じり合う機会はありません」

両親を亡くして多くの人に支えられてきた日野さんは、人のつながりの大切さを実感し、日本人のコミュニティをつくりたいと考えました。グラフィックデザイナー

だった当時、異業種間交流を試みましたが、自分の利益になる人を探す目的だけで参加する人が多く、利害のない人間関係を築くことは難しいと感じたそうです。

渡米して9年目の2002年、日野さんは初めて公園美化活動に参加し、40人の参加者をコーディネートする役を引き受けたことをきっかけに、ボランティア活動に着目します。

「ボランティア活動ならば、参加者のバックグラウンドが何であるかよりも、そのボランティアで受益者に対して何が

できるか？が第一です。活動先では、折り紙が上手な人が人気者になるなど、一般社会とは違う価値観で判断されます。また、そこで一緒に活動することで連帯感が生まれま

す。そして、活動後に肩書を知っても、お互いを品定めしあうようなことなく打ち解けていきます。肩書きではない人と人のおつきあいが続くのです」

ボランティアコーディネイトと課題

NYdVでは、各プロジェクトに責任者として割り当てられたスタッフが、活動の告知、参加者の募集か



日本文化を紹介する活動では、シニア世代が活躍するそうだ。写真は活動中の日野さん。



(左上) メイクアップボランティア。(左下) 公園美化ボランティア活動の様子。
(右上) 日野さんが着ているNYVのオリジナルTシャツは10ドル。これを着て活動する参加者も多い。右下は折り紙の作品。

ら、現場での監督、終了後の報告までを行います。スタッフといっても無償ですが、皆、熱心で責任感がある人ばかりだそうです。

「その理由のひとつは、今までの団体の活動の実績があるからか、信頼性が高く、意識の高い人が集まってくることに非常に恵まれています。そして、活動現場ではスタッフ一人ひとりが、日本人になじみのないボランティアのすばらしさをわかっていただけたら、という強い思いで取り組んでくれています」と日野さんは言いますが、もうひとつ、スタッフの士気をたかめるNYDVならではの秘訣があるようです。

それは、「気持ち悪いくらいお互いを褒めあう」こと。「日本人は褒められることに慣れていないので、初めはとまどいますが、慣れるとクセになってがんばります。また、私たちは、〇〇してはいけません」と言われて育っていますが、アメリカはその反対。最近では、日本のボランティアコーディネートの研修でも、褒めるように指導するようですが、いいことだと思えます。だって、自分たちで褒めなくて誰が褒めてくれるんですか? (笑)」

また、活動の現場においては、「人の輪に入れない参加者を出さない」ことを鉄則に、ボランティア一人ひとりに気を配っているそうです。リピーターも多く、そのなかからスタッフになる人もいます。

順風満帆のように見えるNYDVですが、課題とその対策についてうかがいました。ひとつは活動資金。収入源は、財団の助成金、企業・個人の寄付、事業収入、資金調達イベントでの収入など、さまざまなどころからありますが、代表の日野さん以外のスタッフを有償にするほどには達していません。

そして、スタッフの確保。短期滞在の人が多いため、スタッフとして活動を始めて3、6か月程度で帰国

する人もいるそうです。そこで、現在、アメリカ人スタッフも積極的に入れていきます。

後継者問題もあります。日野さんが資金調達活動に力を入れるために、実務を他のスタッフに引き継ぎたいと考えています。けれども、仕事は多様で膨大なうえ責任が重くなります。さらに、日野さんはNYのテレビ局NY1の「今週のニューヨーク」に選ばれるなど、個人としても注目されていて、「日野さんのNPOなら」という理由で支援してくれる人も少なくありません。

個人で成り立っているという状態から、早く組織として評価していただけるよう、安定した資金を確保し、少しずつ数名に分担して仕事を引き継ぐようにしたいと考えているそうです。

日本との架け橋になりたい

ニューヨークでの活動が軌道に乗ってきた今、日野さんの視線は母国である日本にも注がれています。NYDVでは、日本の学生や企業人のボランティア研修、リタイヤした人の生涯学習として、ボランティア体験の受け入れを始めました。行政、NPO、民間助成団体、中間支援組織などから視察の手配や講演の依頼

もくるようになりました。

「2007年は、全国市議会議員研修として、アメリカの教育現場のセキリティシステムを見学したいというご相談を受け、30、40名をハーレムの学校へご案内しました。大学のNY研修旅行では、ボランティア体験の他に、NYで活躍する日本人を招いてのパネルディスカッション、キャリア開拓のためのワークショップの運営や、地元のコミュニティとの国際交流会の企画もしました。

また、「日本を美しくする会」というグループから毎年5月に数十名が訪れ、ハーレムなど地元の人たちが利用する公共施設の美化活動をしており、その企画手配を5年間行っています。個人の方なら、旅行の合間に半日あれば活動できますし、生涯学習なら語学学校やホームステイとボランティアをセットにしたプログラムをつくることもできます。

私たちには、多くの活動先とのネットワークがありますし、日本人がアメリカの法律のもとにNPO運営をしている経験から、同じ日本人として訪問者のニーズも把握しやすい。アメリカのNPO業界は、参考になることがたくさんあると思います。こんなことは不可能だろうと決めてしまいう前に、まずはご相談していた

海外での刺激的な ボランティア体験!

2007年9月、ニューヨークでホームレスや低所得の人たちに、無料で食事を提供するボランティア活動に参加した。

場所はイースト・マンハッタンにある教会のホールで、University Soup KitchenというNPOが、毎週土曜日にこの会場を借りて活動を行っている。もともとはニューヨーク大学の教員と学生が始めたプログラムで、約25年の歴史があるという。

活動を始める前に、提供する食事と同じメニューのランチがある。まわれ、ボランティアたちは食べながら団体の歴史やミッションなどの説明を聞く。

彼らが活動するうえで大切にしている点について、ディレクターが以下の4点を挙げた。

- ①自分が食べたい(安全で栄養があり、見た目もきれいでおいしい)食事を提供する
- ②レストランのようなサービスを提供する

③コミュニティのつながりを大切に(ホームレスの人たちとボランティアとが交流する機会をつくるなど)

④ボランティアは自分の意志で参加する

気づくと、表には食事を待つ人たちの長い行列ができていた。私たちに役割を与え、テキパキと指示を出すスタッフの姿はカッコイイ。食事を待つ行列はなかなか途切れず、2時間半ほどで約800食を配膳した。

プログラムはすべてボランティアによって運営され、この日は約30名が参加していた。そのうち半数以上は私たち同様、初参加の人びと。ボランティアは雑誌の編集者、弁護士事務所の秘書、フィルハーモニーの資金調達担当者、プロのダンサー、高校の先生、中学生など、実に多様だ。活動終了後には、近くのバーでの交流もあった。

活動をコーディネートしてくれたのはNYdVの日野紀子さん。事前の連絡調整、当日のエスコート、活動先での通訳とその後のフォローアップまで、万全のサポート



プログラムに参加した中学生と、NYdVのコーディネートで参加した日本人は同団体の黒いTシャツを着た5人。

トを提供してくれた。ホームレス支援活動だけでなく、希望者の関心に合わせて、幅広いネットワークを生かし、ニューヨーク中のボランティア・プログラムをマッチングしてくれるという。

英語ができなくてもOK。手ぶらで、気軽にボランティア活動が体験できるのが嬉しい。プログラムによって異なるが、私たちは5人で参加し、コーディネート料は1人60ドル。

ニューヨークでのボランティア体験で得た刺激的な出会いと学びは、100万ドルにも値するものだった。

(NYdVでボランティア体験した参加者に寄稿いただきました)

「だいたいと思っています」

ボランティアアベースでの運営ですが、NYdVのノウハウを応用して、Tokyo de Volunteer(東京でボランティア)の活動も開始しました。2007年には、障害があってもあたりまえに暮らせる社会づくりをすすめているNPO法人ぱれっと(東京・渋谷)の協力で、メイクアップボランティアを実施しました。

また、将来的には、日本国内の社会貢献活動推進、国際相互理解推進、そしてさまざまなバックグラウンドの人たちが、同じまちに住む仲間として集うようなコミュニティの形成に貢献したい、と日野さんは言います。

日本人同士がつかないという課題は、NYだけの問題ではないのではないのでしょうか。日本国内でも、コミュニティの再生や再構築が叫ばれて久しくなっているなか、NYdVの取り組みには、私たちが学ぶべきものがたくさん詰まっています。

*NPO法人ぱれっと

<http://www.ngo-palette.or.jp/>

取材・文 秋池智子・菅野道生

(東京ボランティア・市民活動センター)